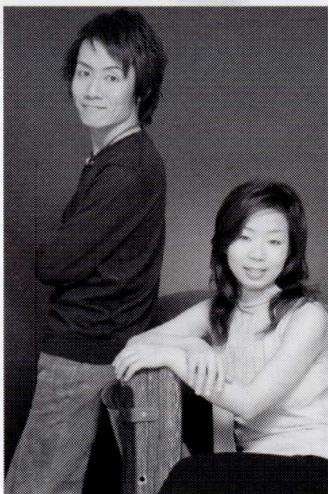


今に続く、憧れの響き



ピアノデュオ ドゥオール

(藤井隆史 & 白水芳枝)

ふじい・たかし & しらみず・よしえ

文責：藤井隆史

僕のピアノ人生で、「あれが弾きたい！」と初めて思った曲は、何の疑いもなく、ギロツク／ソナチネ ハ長調と言えます。第一楽章出だしのあのワクワク感、輝かしさと言つたら！

それは、僕がまだ小学校二年生の頃、初めて出場したコンクールだったと思いまます。

ハ長調の和音から始まる、何とも明快なオーピニングから、二拍目でいきなりの転調？といつた驚き（当時は調までは考えていなかつたでしょうが）、何か新しい世界が始まるかのような出だしに、作品には失礼ながらも、あそこさえ弾ければ充分！と、そこばかり何度も弾いていた記憶があります。

難を言えば、このソナチネの場合、僕にとつてのピークがいきなり曲のオーピニングで出てきてしまうので、その後続く世界が、意外と長く感じられたような……。

当時はソナチネという形式もよく分からず、ピアノの曲って自分の好きなメロディーだけでなく、経過していく何でもない部分があつたり、反芻したり、ハーモニーがどんどん変わって発展していく

曲を選ばれる時、皆様は様々な理由で選曲されると想いますが、僕は昔から、「この曲が弾きたい！」というより、曲の中の特定の「ここが弾きたい！」所がある曲を選ぶことが多いように思います。

平均律のあのプレリユードなら、あの偽終止の悩ましさ、ベートーヴェンのOp.110なら、フーガの旅を経て、最後の最後で主調に戻ったあたりの大感動、ショパンのバラード三番なら、あの流れるよう

傍から見ていると、一種の危ない人かも知れません。

憧れの名曲、思い出の名曲

ピアニストにとって、忘れ得ぬ作品たち

たり、様々な部分で曲が成り立っているんだなア、そしてこの後にまだ第二楽章も、第三楽章もあるとは思いもしなかつた僕にとって、意外にピアノの勉強って長くて大変だ、ということを教えてくれた、最初の作品と言えるかもしません。

● 外国の楽譜への憧れ

そんな僕も小学校高学年になり、めでたく「そろそろあなたもベートーヴェンのソナタを始める頃ね」となったわけですが、先生にレッスンで「グレー」の分厚い、ヘンレ版という楽譜があるから、その一巻を買ってきなさい」と言われ、その帰りに池袋のヤマハさんに寄ることになつたのです。

当時の僕は、この自分が外国の楽譜を買う、という行為そのものに軽く興奮し、自分が急にピアノが上手になつたかのような錯覚を覚え、高鳴る鼓動を抑えることができなかつたことを覚えてます。

珍しく車でレッスンの送り迎えをしてくれた父が、ヤマハさんの前で、「ま、五千円くらいでしょ」と渡してくれた五千

円札を受け取つて店内へと駆け出し、車に舞い戻つてきたのはその数分後。

「お父さん、ヘンレ版で、五千円じゃ買えないよっ！」

確かに当時六千円が七千円くらいした記憶のあるヘンレ版のソナタ集とは、それほど高価なもので、ベートーヴェンのソナタを勉強するとはそういうことなのか……と変な納得をした記憶がありますし、

この重い楽譜を毎週持つてレッスンに通うのだろうか？ この本を全部使うには、どれくらいの時間がかかるのだろうか？ そもそも、ヘンレ版って何？？ と、瞬時に様々な想いが頭を駆け巡り、ギロツクの時とは違う責任感というか、気重さ（？）も感じた思い出があります。

ヘンレ版ソナタの楽譜の重さと比例していたのでしょう。

● ピアノ・アンサンブルへの足掛かり

また、いかにも紙がよろしくない、はるばるポーランドからヘトヘトになつて日本に到着した感のある、当時のショパンのパデレフスキ版（失礼！）のくたび

なぜかパデレフスキ版の紙を触ると、ショパンのコンチエルト第一番第一楽章

ラヴエルの「水の戯れ」一曲だけで数千円していた大学生の頃、「楽譜の値段でそんなに驚いてるようじや、あんたもまだだねー！」と、学内の購買のおばちゃん（大関のおばちゃん）にも呆れられたつけ。

外国の楽譜を思うと、その頃に戻つたようで何とも懐かしく、この気持ちは忘れてたくないものだと感じています。

の、物悲しいあのテーマが頭の中を流れるのは僕だけでしょうか……。

います。

当時の僕の中では、「コンチエルト」と書いてあっても、オーケストラの響きはあくまで想像するだけの世界であり、僕には、合わせでのピアノ二台のハーモニーがずっと鳴っていたのです。

その時のお弟子の先生のバランスもよかつたのでしょう、ピアノの音がつぶし合うことなく、音が何声にもなって、自分の前に見えていたような気がします。

じているのです。

先生方には、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

●普段練習している こんな曲が！

ブルクミュラー＝ハンス・フランク／ 二台のピアノのための25の練習曲

ピアノ二台の衝撃二度目は、高校に入り、レッスンで先生が横で弾いてくださった、それはそれは温かなコンチエルト伴奏の響き。

これって、オーケストラでなくとも、ピアノ曲でもいいかも、と思つたつけ。

今、僕がピアノ・デュオでシンフォニーなどオーケストラ作品を録音し、演奏したいと思うことが多いのも、その経験と喜びが関係しているのかもしれません。

オーケストラ曲をオリジナルのオーケストラで聴くのではなく、響きの幅や深さは違つたとしても、音楽としてのアプローチの仕方、和音の鳴らし方など、ピアノで再現できる世界もある、と強く信

ノのための「25の練習曲」なのです。

この作品では、第一ピアノは、いわゆるソロのブルクミュラーと全く同じのですが、第二ピアノはカノン形式になり、会話の掛け合いを楽しめたり、和音でソロを支えたりと、第二ピアノを先生が弾くことを想定して書かれているのでは？と感じます。

ピアノを弾いていれば、恐らく多くの方が通るであろう道、ブルクミュラーの25の練習曲。

僕が弾いていた頃は、練習曲という本の名前は忘れ、『せきれい』とか『無邪気』などタイトルの付いている「曲」を

弾いている感覚が強かつたのですが、自分が教える立場になり、これらを練習曲として捉えると、何と複雑だけど美しい！と、思わず聴るだけの内容を兼ね備えた曲集ですよね。

技術的にそれほど難しくなく、響きに耳を澄ませるのにちょうどよいのです。

生徒さんにとって、普段練習している作品が第二ピアノと一緒になることで、温かさとハーモニーに溢れた作品となり、もっともつとピアノ同士で合わせがしたい！と思わせてくれる、画期的な作品と言えるでしょう。

僕が子どもの頃にこの作品に接していたら、耳や感覺もまた違つただろうか、と想像することもしばしばです。

ところでこのハンス・フランクさん、

練習曲としての価値を持つ作品と、ピアノ・アンサンブルに慣れ親しむ作品の両面で学ぶことができるのが、このハンス・フランク氏編曲による、二台のピア

憧れの名曲、思い出の名曲

ピアニストにとって、忘れ得ぬ作品たち

ピアノデュオ ドゥオール（藤井隆史&白水芳枝）

2004年にドイツにて結成後、国内外にて350以上のステージを踏み、ピアノデュオを中心とした活動で高い評価を受けるドゥオール。

藤井隆史は、東京藝術大学付属音楽高等学校、同大学、同大学院（修了時ベーゼンドルファーリサイタル出演）にて植田克己、K.シルデ両氏に師事。現在、東京藝術大学、武蔵野音楽大学非常勤講師。

白水芳枝は、兵庫県立西宮高等学校音楽科、東京藝術大学卒業。笠間春子、井内澄子両氏に師事。現在、国立音楽大学、共立女子大学非常勤講師。

それぞれ文化庁（藤井）、野村財団（白水）、DAAD（デュオ）の奨学生として独・マンハイム音楽大学大学院にてR・ベンツ、P・ダン両氏のもとで学び、ソロ科、ピアノデュオ科を最優秀で修了。

各々ソリストとして国際コンクール入賞、東京文化会館他でのソロリサイタル、コンサート、NHK-FM、ドイツラジオベルリン出演など毎日にて活動。

ピアノデュオではロンドン、青山財団パロックザール賞、シーベルト、M.ドナノフなど国際的賞を受賞。

日本、ヨーロッパ各地にてデュオリサイタルを開催し、米ではコンサート・ツアーも行なう。

近年国内では文化庁芸術祭参加公演、NECガラコンサート、日本演奏連盟クラシックフェスティバル、トップホールシリーズ“Pianists”、現音創立80周年記念事業特別音楽展などにも出演した。NHK-BS、FM出演、FM西東京パーソナリティの他、審査にも携わる。

3枚のCD「ドゥオール」(NAT08401)、「SYMPHONIE」(NAT09501)、「JEWEL」(NAT111211)《以上、問合せ：NAT TEL.077-535-7384 <http://www.natltd.net/>》は各方面から話題を呼び、レコード芸術誌にて特選盤、準特選盤に選出。2010年東京でのリサイタルが音楽の友誌「コンサート・ベストテン2010」に取り上げられるなど、独自の音楽性で今後が益々期待されるピアノデュオである。

公式サイト：www.yoshie-takashi.com

公式ブログ：<http://ameblo.jp/yoshie-takashi/>

ドゥオール コンサート情報

8月24日(金) レクチャーコンサート

10月23日(火) コンサート

11月12日(月) ピアノデュオ講座 他

詳細は公式サイトにて



オーストリアかドイツの実在する方がと思つていましたら、このお名前はペニネームで、ご本人は日本人でいらっしゃる、とか！
一度お会いしたいものです。